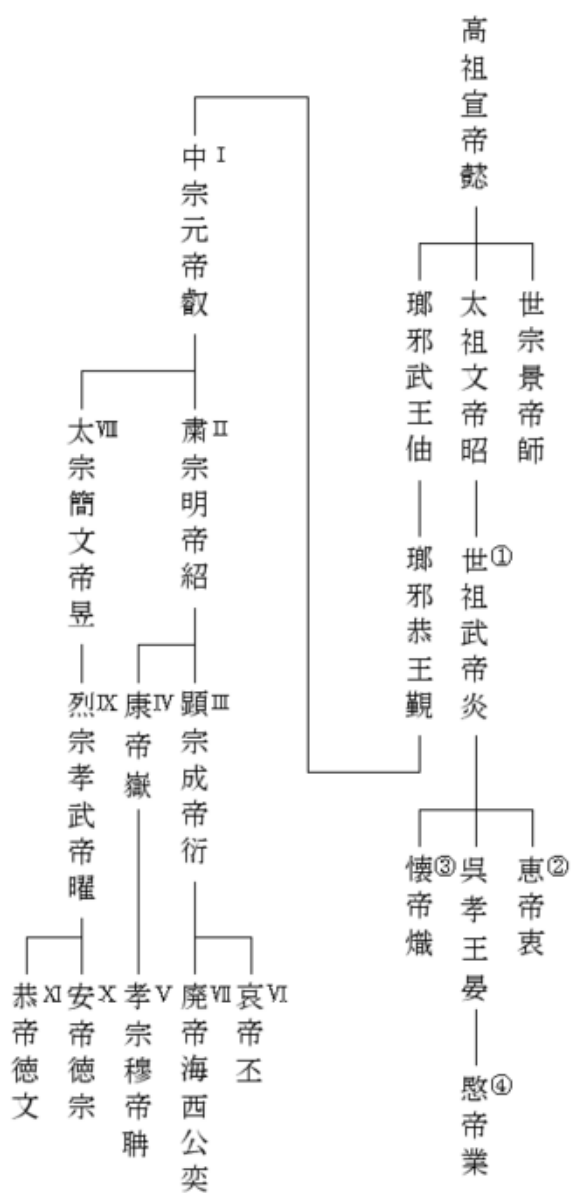


正史を訪れる

八章 晋書の時代

森隆一



Wikipedia「西晋」より

晋系図

(丸囲み数字は西晋の即位順、
ローマ数字は東晋の即位順)

はじめに

晋書は 648 年に唐の太宗の命により、房玄齡・李延寿らによって編纂された。

Wiki 「晋(王朝)」によれば

晋 265-420 は、中国の王朝の一つ。司馬炎が魏最後の元帝から禅譲を受けて建国した。280 年に呉を滅ぼして三国時代を終焉させ、通常は匈奴(前趙)に華北を奪われ一旦滅亡するも、南遷した 317 年以前を西晋、以後を東晋と呼び分けているが、西晋、東晋とも単に、晋、晋朝を称していた。東晋時代の華北は五胡十六国時代とも称される。首都は洛陽、西晋末期に長安に遷った後、南遷後の首都は建康(南京)。宋により滅ぼされた。

晋書の扱う範囲は 265 年から 420 年までで、謎の四世紀と呼ばれている時代は完全に含まれ、同じく謎とされている五世紀も一部が含まれる。317 年以降は南部に追われ東進とよばれている。なお、北部は五胡十六国時代の時代となった。

前号で作業仮説候補 5.1 を準備していたが記載するのを忘れていた。
これを付録にすることにした。また、作業仮説のうちから、記年に関するものを‘紀年基準’として分けることにした。

8.1. 晋書の記事

晋書では外夷は四夷傳一卷に書かれている。晋の成立時には、まだ呉の征討は終わってなく、北方では鮮卑系諸部族が支配していた。また、統一後は内紛が続いたため、東夷の朝貢が少なかったのではないか。倭についてはそんなに長くはなく簡単なものである。

四夷伝で扱われている東夷の国は順に夫余国・馬韓・辰韓・弁韓・肅慎氏・倭人・裨離で、高句麗が取り挙げられていない。これは、高句麗の朝貢がなかったからではないかと思っている。何故朝貢がなかったかは興味がある。313年に楽浪郡と帯方郡は高句麗により滅ばされた。恐らく、その領有するところとなった。

辰韓条に弁辰がかかれ、

“皆は辰韓に属する。辰韓は馬韓人から主をつくる。代々受け継がれているが、自立できない。”

皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主 雖世世相承 而不得自立

と書かれている。三国志では弁辰は辰王に属するとしている。馬韓・辰韓・弁韓は晋書以降の正史には登場しない。楽浪郡と帯方郡の滅亡後百済と新羅によりとって代られたと考えている。

倭は倭人となっている。状況は魏と殆ど同じということだろうか。風俗などは後漢書よりも簡略な三国志のダイジェストのように見える。

百済は四夷伝では取り挙げられていないが、簡文帝紀に

“東晋簡文帝咸安二年 372 正月百済と林邑の王は夫々朝貢した。”

百済 林邑王各遣使貢方物

“六月 使いを送り、百済王の餘句を鎮東將軍領樂浪太守に叙した。”

遣使拜百済王餘句爲鎮東將軍 領樂浪太守

の2つの記事がある。これが正史における百済の初出である。領樂浪太守という書き方は初出である。領樂浪太守というのは、百済王とは重複するような気がする。官位と職名、あるいは、百済王は百済の支配者として認め領樂浪太守は官位と考えておく。とにかく、この時点で、百済は樂浪郡の地にあった。百済が漢城(現在の京城)にあったとすれば、樂浪太守でなく帶方太守のほうがふさわしいと思える。この記事が四夷伝ではなく帝紀にかかれているのもまた興味ある問題である。ここで、疑問を設定しておく。

疑問 8.1. 晋書で高句麗条がないのは何故か。また、百済が四夷伝ではなく帝紀に書かれているのは何故か。

晋書で、倭条の 300 年辺りまでの記年記事は

“宣帝が公孫氏を平定 238 するや、その女王は帶方郡に使いを送り朝見した。その後も朝貢は続いた。文帝が相国についたとき 263 とその後も数回行われた。”

宣帝之平公孫氏也 其女王遣使至帶方朝見 其後貢聘不絶 及文帝作相又數至と

“泰始初 265 重ねて朝貢した。”

遣使重譯入貢

の 2 つである。238 年は景初 2 年で、文帝は司馬昭である。247 年には倭の王は壺与になっていたから、263 年以降の朝貢は壺与によるものである。263 年以降の数回に泰始初年入っているかはわからないが、泰始初年は武帝司馬炎が晋朝を開いた年である。宣帝司馬懿が公孫氏を征討した景初二年、文帝司馬昭が相国についたときと 3 代続いて(祝賀の)朝貢を行っている。遼東郡以東を支配していた公孫氏を征討したことによる対応とだろうが、当年に遣使できるのは、朝鮮半島にいないとできなかったと考える。また、この 2 つの記事からは、泰始初年 265 は女王であった。作業仮説 7.2 とあわせれば、この時の女王は壺与となる。

この次は安帝紀の記事

“義熙九年 413 高句麗と倭国と西南夷の銅頭大師が方物を献じた。”

高句麗 倭國及西南夷銅頭大師並獻方物

の記事までの 157 年間、正史には倭の記事がない。なお、義熙は東晋の安帝 397-418 時代の最後の元号である。この記事は、南史の

“晋の安帝のとき、倭王の贊が朝貢した。” 晉安帝時有倭王贊遣使朝貢
は同じと思われ、義熙九年の記事には 413 に朝貢した王の名は？。

百済と同じように、東夷○○国の朝貢も、四夷伝ではなく、帝紀に書かれている。四夷伝には馬韓と辰韓の朝貢も書かれているため、この東夷○○国は馬韓と辰韓とは異なるとするのが自然である。

これを疑問として設定しておく。これは疑問 8.1 と共通するかもしれない。

疑問 8.2. 東夷○○国の朝貢は何故帝紀に書かれているのか。

晋書の帝紀に書かれている東夷○○国の朝貢の年を表にした。併せて馬韓と辰韓の朝貢の年も記入した。○○には数字がはいる。これは朝貢ごとに国の数が異なっているため書いておいた。

表 8.1 東夷〇〇国 の朝貢

年	泰始初年 265	咸甯二 276正月	六月	三年 277	四年 278正月	是歳	太康元年 280六月	七月
東夷〇〇国	倭人	八	十七	三	六	九	十	二十
馬韓							○	
辰韓							○	

年	二年 281二月	六月	三年282	七年 286正月	八月	是歳	八年287	九年288
東夷〇〇国	五	五	二十九	十一	十一	十一	二	七
馬韓	○					○	○	
辰韓	○					○		

年	十年 289五月	是歳	太熙元年 290	惠帝永平 元年291	孝武帝大元 七年382
東夷〇〇国	十一	三十	七	十七	五
馬韓	○		○		

後漢書・三国志には韓の国の朝貢の記事は、

“建武二十年 44 韓人の廉斯人蘇馬らが楽浪郡に朝貢した。”

韓人廉斯人嚙/甦/蘇馬謐等 詣樂浪貢獻

のみである。楽浪郡が近いため、軍の直接の統制を受けていたのかもしれない。

ぴんいん 嚙: sū、甦: sū、蘇: sū 蘇

晋書では、太康元年 280 から太熙元年 290 までの 11 年間に、馬韓は 6 回、辰韓は 3 回の朝貢が記録されている。また、初めの朝貢した年には東夷〇〇国も朝貢している。

弁辰は辰韓条の中に 又有弁辰 亦十二國 合四五戸 各有渠帥 皆屬於辰韓 の文が挿入されていると解釈した。ここでも三国志と同様に、弁辰の扱いが普通ではない。

東夷〇〇国の最初の朝貢は咸寧二年 276 で泰始初年 265 の 11 年後のことである。恵帝の永平元年 291 までの西晋の時代で、27 年間に 20 回行われている。1 年に 0.75 回である。1 年に 1 回といってもそれ程言い過ぎではないだろう、帯方郡の郡衙に行ったとしても離れていては難しい。楽浪郡も考えられるが、北には高句麗がある。楽浪郡の東北からは、地図から見るに、道が険しく、これも困難だろう。残るは韓の南の倭の地で、作業仮説 5.4・7.1・7.2 からは、倭の構成部族で残った部族と考える。

倭王と幾つかの構成部族が移住した後、後漢書でいう大王となる国が現れなかったため、帯方郡に使いを送り晋に朝貢して、後ろ盾としたのではないか。さらには、景初二年 238 の記事では倭王の他に、恐らく正使の難升米は率善中郎將、副使の牛利は率善校尉に叙された。彼らは、倭王直属の高官か、構成部族の首長か彼に近いひとであったであろう。朝貢の目標では返礼としては爵位を得ることか、帯方郡太守に紛争の仲裁をもとめたかが考えられる。回数が多く、年に複数回行われているこ

とは複数国で共同すれば、朝貢が可能とおなつたと考えられる。永平元年 291 で何故途絶えるのかについては、百済と新羅が関係していると想っているが確信にはなっていない。

8.2. 壹与と台与

三国志から、倭の王は 男王 → 卑弥呼 → 男王 → 壹与 となっている。

Wikipedia「台与」では

壹與：三国志魏書東夷傳の倭人之条、(通称魏志倭人伝、陳寿編纂、3世紀・晋代)では2写本系統とも壹與と記載されている。発音は`い(ゐ)よ`か?。新字体では壹与。

臺與：梁書諸夷伝 倭(姚思廉編纂、636年・唐代)、北史四夷伝(李延寿編纂・唐代)などに記述。新字体では台与。

と書かれている。三国志では既に見たように 復立卑彌呼宗女壹與・・・である。梁書では次のように記されている。

“(訳)ふたたび卑彌呼の宗女である臺與を王とした。その後男王をふたたび立てた。また、中国の爵命を受けた。晋の安帝 397-418 のとき、贊が倭王であった。贊が死に、弟の彌が立った。彌が死に、子の濟が立った。濟が死に、子の興が立った。興が死に、弟の武が立った。齊の建元 479-482 の間に武を持節督倭新羅任那伽羅秦韓慕韓六國諸軍事鎮東大將軍に叙した。高祖が即位したとき、武を征東將軍に進めた。”

復立卑彌呼宗女臺與爲王 其後復立男王 並受中國爵命 晉安帝時 有倭王贊 贊死
立弟彌 彌死 立子濟 濟死 立子興 興死 立弟武 齊建元中 除武持節督倭新羅任那伽
羅秦韓慕韓六國諸軍事鎮東大將軍 高祖卽位 進武號征東將軍

ここで、中國と自称していることが目につく。

南朝は 宋 → 齊 → 梁 → 陳 と替った。

壹と臺の用いられているのは、三国志では壹が用いられ、後漢書と梁書では臺が用いられている。成立は、三国志が3世紀末、後漢書が432年、梁書が636年である。また、上で引用した梁書の記事の高祖の在位は502-549年ねんである。

壹與と臺與は同一人でとするのが定説である。表記の差については、中国語の発音に求めているものから、単なる書き間違いなどの考察が為されている。正史の記事からは、同じ人とみるのが自然と考えられる。三国魏は北の王朝であり梁は南朝の王朝である。しかも東夷担当の官僚は遼東郡などさらに北方の出身者が携わっていたと思われる。2の中国語はアルとリャンがありどう違うかわからなかった。中国を旅行したとき、南ではリャンできたではアルが通用した。3も北では日本語のサンで南ではシャンのほうが通じた。

一方、字と発音が異なるのだから、壹與と壹與は別人と考え、同じという積極的な理由がみつからない限り同じ人とししないのも自然である。この別人とする考えは、いまのところ、見た記憶がない。

この立場からは倭の王は

男王 → 卑弥呼 → 男王 → 𪛗与・台与 → 男王 . . .

→ 讚で始まる五王

と替わったことになる。これからは、𪛗与は伊予を、台与は豊を連想させ、東遷のイメージが変わってくるが、こちらのほうが面白い。

正史から得られるのは以上である。これが、謎の四世紀・五世紀と名付けられた根拠である。三国志には倭の記事が数多くみられるが、戦闘や通行の記事で、倭の王名は書かれていない。

この時代の倭(日本)を扱った正史は、日本書紀のみである。したがって、できるかどうかは別にして、日本書紀から何かきっかけを探していくことしか方法がないと考える。

日本書紀に現れ、よく知られている女性としては、神功皇后、推古天皇、持統天皇が挙げられる。この他に、天照大神も挙げられるが、女神は女性かどうか。天照大神は神代卷上に書かれているが、神代は記年記事がないことと、文章が難しいことから、神代上下は扱わないことにす

る。天の岩戸の話は 卑弥呼 → 男王 → 壺与 を想起させる。この他では、飯豊皇女が挙げられる。

Wikipedia「日本神話」では、

日本神話と呼ばれる伝承はほとんどが、古事記・日本書紀、および、各風土記の記述による。そのため高天原の神々が中心となっているが、出典となる文献は限られる。また、地方の神社や地方誌の中にも上記三つの文献には見られない伝承を残している。

と書かれている。これからは、日本神話は官製のもの、あるいは、官の認めたものということができる。

日本書紀は 720 年に完成した。作成の意図はこの頃には確定していた日本という国を、天皇を首長とする国家体制が古くから存在し、各貴族の祖先をその体制に位置付けることであったという。卑弥呼の時代は紀作成時から 500 年ほど前のことで、日本の成立はその 100 年から 200 年の間のことである。今では、この四・五世紀に蓋をすることが目標ではないかと想っている。謎の四世紀・五世紀と言われているように、この目標は十二分に達成されていといえる。日本書紀の編纂時から見ての四・五世紀は、現在から見れば、ほぼ戦国時代から江戸幕府成立時であ

る。旧家では、先祖は何々の戦いで功績を挙げた等は未だに言い伝えられている。しかし、それが少々変わろうとも、あるいは、おかしいと言われてもあまり問題とはならないであろう。

記の成立時において、かなりの豪族はその先祖が朝鮮半島から女王に率いられて九州の玄界灘や中国地方の日本海側に移住し、近畿地方に移ったということが伝承されていたとも考えられる。先祖が女王に率いられて日本列島に移住したと言われている豪族もかなりいたのではないか。このような場合、伝わるのは大まかなことであり、断片的である。細部はほとんど伝わらず、それが現状に殆ど影響しなければ、異論をはさむ人はいないであろう。

今のところ、先祖に関して伝承されたもののうち、年代を付けた記事としては困るものを説話風にしたものが神代上下ではないかと考えている。この困るもの、あるいは、蓋をしたいものはなんだろうか。四・五世紀に東遷が行われたことと、倭は部族連合国家であったことではないかと考える。

I N R I 委員会「日本史における「[謎の4世紀](#)」とは？」では、これに関する概説が書かれている。

8.3. 神功皇后紀 魏志云

前節で述べた発想に従って、日本書紀を眺めていくことが目標となる。本格的に取り組むには、東夷伝の他の東夷の概略、三国史記の概要などを把握しておくことが有益と考える。

日本書紀で神功皇后紀が目につく。それは、天皇でない人に1巻が割り当てられているということである。年紀は仲哀天皇〇〇年で始まり、仲哀天皇の葬儀後、皇太后となり、摂政元年とすると記されている。そうならば、神功皇太后紀でもよいのではないか。あるいは、大月氏にあるように、皇太后が政治を摂る制度があったのではないかと考えさせられるなど幾つかの疑問が湧いてくる。

神功皇后紀で注意的に書かれている次の記事がある。

“卅九年この年が魏志のいう明帝景初三年六月で・・・”

是年也 太歳己未 魏志云 明帝景初三年 239 六月・・・

この記事を考えてみる。これは、三国志では景初二年 238 の記事である。さらに、

“四十年は魏志のいう正始元年で、・・・”

魏志云 正始元年 遣建忠校尉梯携等 奉詔書印綬 詣倭國也

がある。正始元年は 240 年で、この記事の記年は三国志と一致している。さらに「空企画」とも一致している。同様の記事は、四十三年 魏志云 正始四年 243 と 六十六年 是年 晉武帝泰初二年 266 の 2 つの記事がある。後者は、晋書では泰始初年となっている。

何故ここで魏志を引用するのかという疑問をまず思い浮かぶ。さらに考えてみれば、これらの記事を取り去っても、神功皇后紀としては、他を修正する必要はない。ということは、日本書紀の著者は、何らかの理由により、あるいは、何らかの意図をもって、これらの記事を引用しここに置いたということになる。少なくとも、神功皇后から、卑弥呼を想起させたいということは間違いないであろう。しかし、引用しているのは朝貢したという記録のみである。三国志で最も内容のある正始八年 247 の記事が引用されていない。これより、内容的に意味のある部分は紀には引用されていず、卑弥呼と壺与に関する具体的なことは知られなくなかったと言える。これより、記年が一致していてきりのよい四十年の記事から次の紀年基準をおく。

紀年基準 8.1. 神功皇后四十年は魏の正始元年で、西暦は 240 年である。元年は 201 年となる。

また、これより幾つかの問題が発生する。例えば、作業仮説 7.2 では卑弥呼は 243 年までに亡くなっている。これからは、神功皇后四十三年以降は卑弥呼はいなかったことになる。

三国志では、卑弥呼男王が立ったが、国が乱れた為、宗女の壹与を共立した。天岩戸の話は、これを説話風にしたもののように思える。すなわち、卑弥呼と壹与(さらに、あるいは、台与)の事跡を神功皇后とし、祖先としての神格的部分を天照大御神としたのではないかと考える。これを作業仮説としておく。

作業仮説 8.1. 卑弥呼と壹与の事跡が神功皇后紀となり、神格的部分と九州への移住が天照大御神となった。

神功皇后紀には、百済の王の即位と死亡の記事が書かれている。訳を付けずにこれらを列挙する。なお、紀年基準 8.1 から算出した西暦を付しておく。

五十五年 255 百済肖古王薨

五十六年 256 百済王子貴須立爲王

六十四年 264 百済國貴須王薨 王子枕流王立爲王

六十五年 265 百済枕流王薨 王子阿花年少 叔父辰斯奪立爲王

Wikipedia の百済の各王の項目から在位期間を抜き出していく。

肖古王の在位期間は 166 年から 214 年である。

貴須王を仇首王とすれば、在位期間は 214 年から 234 年である。

枕流王はわからない。流の付く王は仇首王子の子に沙伴王、比流王がいるが、第 7 代沙伴王は 234 年に即位、第 11 代比流王は 304 年に即位したとされている。

辰斯王の在位期間は 385 年から 392 年である。

阿花王と思われる阿莘王の在位期間は 392 年から 405 年である。

これらからは、肖古王の没年の 214 年から辰斯王の即位した 385 年までは 169 年となる。肖古王の没年を神功皇后五十五年 255 としても辰斯王の即位した 385 年までは 130 年となる。肖古王・仇首王を近肖古王・近仇首王としてみる。

近肖古王の在位期間は 346 年から 375 年で、

近仇首王の在位期間は 375 年から 384 年である。

この近仇首王から辰斯王・阿花(莘)王へは、連続して繋がる。近仇首王の没年の 375 年から辰斯王の即位した 385 年までは 10 年となり、神功皇后紀の 10 年と同じになる。しかし、辰斯王の即位した 385 年を神功皇后六十五年 265 とすれば、120 年のギャップが生じる。

応神天皇紀でも百済の王について触れている。神功皇后紀と同様にこれらを抜き出す。

三年 272 是歳百済辰斯王立

十六年 285 是歳 百済阿花王薨

廿五年 294 百済直支王薨 即子久爾辛立爲王

阿花(莘)王の在位期間は 392 年から 405 年である。百済の王統から直支王は腆支王と考える。腆支王の在位期間は 405 年から 420 年で、没年の差は 126 年である。

宋書では

“百済王の餘映を使持節都督百済諸軍事鎮東將軍百済王とした。”

義熙十二年 416 以百済王餘映為使持節 都督百済諸軍事 鎮東將軍 百済王

百済本紀では

“十二年 416 東晉の安帝に使を派遣した。使持節都督百済諸軍事鎮東將軍百済王に冊封された。”

東晉安帝遣使 冊命王爲使持節都督百済諸軍事鎮東將軍百済王

があり、対応している。Wikipedia「腆支王」からは、腆支王は百済の第 18 代の王で在位期間は 405 年から 420 年である。先代の阿莘王の長男。

梁書では余映、日本書紀では直支王と記される。これから、次の紀年基準を得る。

紀年基準 8.2. 応神天皇廿五年は百済の腆支王十六年で、420 年である。元年は 396 年となる。

「空企画」での即位年 270 年より、126 年遅いことになる。また、卑弥呼の卒年の下限 247 年からは、170 年程の差となる。

これからは解決すべき問題が 2 つ生じる。これらを疑問としておこ
う。

疑問 8.3. 神功皇后との間が 130 年程空くことになる。逆に言えば、神功皇后 = 卑弥呼 + 壺与(・台与)の卑弥呼以後 130 年余りが隠されたことになる。この隠されたものは何か。

疑問 8.4. 応神天皇以降で、天皇の在位期間の合計が 136 年短くなることになる。本稿の立場からは遣隋使が派遣された 600 年以降は信用できるとする。「空企画」の応神天皇の即位年の 270 年から 600 までの 330 年を 200 年に縮めることができるかということである。

8.4 疑問 8.3・8.4 に対するイメージ（まとめ、粗筋）

疑問 8.3・8.4 について考える前に、神功皇后四十年＝240 年以後、作業仮説を入れて倭の状況を考えてみよう。

作業仮説 7.2 から、卑弥呼は 238 年から 243 年の間に亡くなった。壺与の即位は、正始八年 247 の記事から、その直前直前と考えた。卑弥呼と壺与の間に男王がいたことから、もう少し下がるかもしれないが、取っ掛かりが見つからない。この後、泰始初年 265 から安帝の義熙九年 413 年まで、朝貢の記事は無い。

この間に、東夷〇〇国の最初の朝貢は咸甯二年 276 から恵帝の永平元年 291 までの 27 年間に 20 回行われ、孝武帝太元七年 382 にも 1 回行われている。この東夷〇〇国は、倭の構成部族で朝鮮半島に留まった部族たちと考えた。朝貢の原因としては、楽浪郡と帯方郡の弱体化と盟主の倭王が移住し、高句麗の南下の圧力が百済の韓の地での勃興が考えられる。四夷伝に書かれていないのは、少なくとも、韓とは別の国であったと見られていなかったのであろう。

この東夷〇〇国の朝貢が始まった咸甯二年 276 が倭の移住の下限となると考える。女王国への旅程は魏の時代のものであるから、倭の移住は

魏の時代に行われ、その上限は正始八年 247 である。作業仮説 7.1 と重複するが、その詳細版として次の作業仮説をおく。

作業仮説 8.2. 倭の移住は正始八年 247 から泰始初年 276 の間に行なわれた。

旅程の記事からの女王国の支配地域は、北九州の沿岸(玄界灘)地域と(博多湾の北か南かは判定できないが) 21 カ国である。これ以外に、倭王と諸部族の朝鮮半島の故地が考えられる。倭王朝にとっては、朝鮮半島の故地の維持よりも、日本列島をさらに支配していくことのほうが重要になってきたと考えられる。このとき、魏の印綬と黃幢が有効であり、このことが後の五王の朝貢に繋がると考える。移住の要因の 1 つで挙げた鉄鉾脈の枯渇を考えられる。

挑戦遠征や九州討伐の話に関しては、本の話に往路を加えて遠征の話としたことも考えられる。神功皇后紀に関してはそのような操作が為されたのではないかと考えている。

神話においては、加上説というものがある。手法に対して説というのは少し違和感を感じるが、とにかく、神話の作成時に意図して用いられたのではなく、結果として、そうなったという話と考える。

Wikipedia「加上説」では、

後代に生まれた説話はその発展の歴史過程で、先発の説話より古い時代にそのルーツを求めて取り入れ加えられていき、複雑さを増していくものだという学説。古い神々ほど、後の世に新しく上に重ねられる傾向をもつとしている。いわば神話における加上説とは、主流派となる氏族の祭祀を続けつつ、置き場が無くなった非主流氏族の神を古い時代にあったものとして組み入れたものが古代神話に残っているという仮説である。

この加上説と作業仮説 8.2 からは、神功皇后以前のこととして書かれていることの幾つかは、実際は神功皇后以後のことと考えることができる。系譜関係の記事以外は殆ど内容のない欠史八代を除けば、神武天皇と、崇神天皇から仲哀天皇までである。加上説からは、初代の神武天皇が一番新しいことになり、仲哀天皇が神功皇后の次になる。

景行天皇紀の主な内容は熊襲征討である。神武天皇紀には東征(東遷)の話(のみ)が書かれている。東遷の順序としてはこちらのほうが自然である。また、面白いことに、神武・崇神・応神と漢風諡号に神が含まれ

ている天皇 3 人が重なってくることになる。これは、神功皇后に関する作業仮説 8.1 と同様のことがいえるのではないかという期待を抱かせる。

紀年基準 8.2 からは、崩御の応神天皇四十一年は 436 年となり、在位期間は 396 年から 436 年となる。これには、倭王讃の朝貢した安帝の義熙九年 413 は含まれる。

作業仮説 8.4. 倭の五王の時代に倭の東遷が行われた。

付随して次を疑問としておく。

疑問 8.5. 東征はいつ 始まり、 終わったか。

疑問 8.6. 東征の出発地は何処か。

疑問 8.4 で下限として挙げた遣隋使が派遣されたのは 607 年で、推古天皇十五 607 年の記事と隋大業三 607 年の記事が対応している。

この対応ほど確実ではないが、雄略天皇六年 461 の 吳國遣使貢獻 という記事と、宋書の世祖大明六年 462 の 詔曰 倭王世子興・・・という

記事がある。これを基準とすれば、270年から460までの190年を70年に縮めることになり、ハードルは高くなる。

イメージとしてはまとまっていないが、参考となる事実として、(日本の)南北朝が挙げられる。並立していた王朝を1つにしたことが考えられるのではないかと想っている。

スケールは異なるが、アレキサンダー大王に見られるように征服地におかれた部隊が独立し王朝をたてたことが参考となる。東遷の過程でも同様なことが起き、並立していた王朝を1つにしたことが考えられないか。

4世紀の倭王を扱っているのは日本書紀しかない。東遷を念頭において、日本書紀を調べていくことにより、上のイメージが肯定されるか否定されるか、どちらでもないかなど何らかの成果がえられることを目指していくが、三国史記の500年以前を眺めることから始める予定である。

おわりに

倭の朝貢について思いついたことを書いておく。

晋王朝は 265 年から 420 年まで続いた。この間、280 年に呉を滅ぼして統一王朝となったが、北方系民族との戦闘に破れ、317 年に揚子江の南岸に逃れた。都は洛陽 265-313・長安 313-316 から建康(南京、呉の建業)に移った。地理的には北晋と南晋であるが、何故東西か。

謎の四世紀・五世紀と呼ばれている時期である。これは、晋書に倭(人)の記録が朝貢したというのみの記事しかないことによると思われる。朝貢の記事は 文帝作相 又數至 泰始初 遣使重譯入貢 のみである。さらに、文帝作相は 263 年で、泰始初年は 265 年である。すなわち、倭の朝貢は晋の成立時のみである。

三国魏と異なり、東夷の状況もわかってきたことと、呉を単独で撃ち破ることができること、また、北方民族に遮られて、その奥にある東夷などは興味の対象ではなかったと思われる。

一方、倭にとっては、朝貢したのは朝鮮半島にいたときと思う。日本列島に移ってからの朝貢は割が合わないと判断したと想っている。朝貢に用いる船と貢ぎ物を準備するのを戦費に充てれば、かなりの地を征服できると思われる。

歴史についての記憶を述べておく。

小学校時代は歴史より地理に興味を持っていた。郷土史の副読本を見ていた記憶があるが、恐らく小学校時代と想っている。ここに書かれている‘北野廃寺’という名称は今も覚えている。

中学校の時には、信長・秀吉・家康の電気ものを読んだ。前2つは吉川英治、家康は山岡荘八ものである。ここでは歴史というよりも、旅行記的に読んでいた気もする。

中学か高校か思い出せないが、歴史の授業で教師が‘宇頭’駅の近くで古墳が発掘されたといい、興味があれば見に行ってみたらというようなことを言った。何人かで駅で待ち合わせ身に行くことにしたが、当日現れたのは筆者以外に1人だけであった。天井石のない石室があっただけという印象が残っている。

古代遺跡を巡る旅は、あまり、面白いものではない。古代遺跡は、基本的には、石ころが転がっているに近い状況である。

学生時代に次を読んだ。

江上波夫「騎馬民族国家」中公新書、1967

金達寿「日本のなかの朝鮮文化」

松本清張「古代史疑」中央公論社、1968

宮崎康平「まぼろしの邪馬台国」講談社、1967

この他に、井上光貞、上田正明、梅原猛、及び、今西錦司とその弟子たちの著作物などを読んだ。現在、これらの本は、荷物の底に沈んでいる。

石仏の写真を撮ることに興味が移っていった。石仏のうちに摩崖仏がある。日本では、大分県の大野川沿いには数多くの摩崖仏が見られる。大野川からは離れているが、臼杵石仏も近くにある。

現在は国宝に指定され、Google Map からは、覆堂が造られ、観光センターなどの建物が並んでいる。初めて訪れた四十年ほど前は、川沿いに駐車スペースがあり、石仏群の方には里山の路が続いているだけであった。

数年前に、こんな所に何故このような摩崖仏群ができたのかを考えるため、資料をあさることにした。鑑賞記的なものは多いが、由来について参考となるものは

京都大学文学部考古学教室編「豊後磨崖石仏の研究」京都帝国大学文学部 考古学研究報告第9冊、臨川書店、1976

が見つかったが、これは学術論文であり、簡単に読めそうにもなかった。ここで、真野長者の伝承に触れているのが気になり、この資料を探した結果、「[真名野長者考](#)」、これに関連する説話を加えた、雑学の世界「[炭焼小五郎](#)」を見つけた。

これを見ていると、これは「豊の国の歴史」をデフォルメしたものではないかと思えた。石仏がらみでは、国東半島も大分県にある。国東は「くにさき」と読むことになっている。これに関しては、この地を国の先という時代をもった国があったのであろうと思ったことがある。

豊の国にいて東に行ってしまったものでよく知られているのは邪馬台国である。ということで正史の東夷伝を読み始め、プロローグで述べた、韓条と倭(人)条の記述の差をみつけたことが本稿のきっかけとなった。

付録 晋書の韓条と倭人条

韓（馬韓 辰韓 弁韓）

韓種有三 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓在帶方南 東西以海爲限

馬韓居山海之間 無城郭 凡有小國五十六所 大者萬戶 小者數千家 各有渠帥俗少綱紀 無跪拜之禮 居處作土室 形如塚 其戸向上 舉家共在 其中 無長幼男女之別 不知乘牛馬 畜者但以送葬 俗不重金銀錦罽 而貴瓔珠 用以綴衣或飾發垂耳 其男子科頭露紒 衣布袍 履草屨 性勇悍 國中有所調 役 及起築城隍 年少勇健者皆鑿其背皮 貫以大繩 以杖搖繩 終日歡呼力作 不以爲痛 善用弓楯矛櫓 雖有鬥爭攻戰 而貴相屈服 俗信鬼神 常以五月耕種 畢 群聚歌舞以祭神 至十月農事畢 亦如之 國邑各立一人主祭天神 謂爲天君 又置別邑 名曰蘇塗 立大木 懸鈴鼓 其蘇塗之義 有似西域浮屠也 而所行 善惡有異

武帝太康元年 二年 其主頻遣使入貢方物 七年 八年 十年 又頻至 太熙元年詣東夷校尉何龕上獻 咸寧三年復來 明年又請內附

辰韓在馬韓之東 自言秦之亡人避役入韓 韓割東界以居之 立城柵 言語有類秦人 由是或謂之爲秦韓 初有六國 後稍分爲十二 又有弁辰 亦十二國 合四五萬戶 各有渠帥 皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主 雖世世相承 而不得自立 明其流移之人 故爲馬韓

所制也 地宜五穀 俗饒蠶桑 善作縑布 服 牛乘馬 其風俗可類馬韓 兵器亦與之同 初生子 便以石押其頭使扁 喜舞 善彈瑟 瑟形似築。

武帝太康元年 其王遣使獻方物 二年復來朝貢 七年又來。

倭人

倭人在帶方東南大海中 依山島爲國 地多山林 無良田 食海物 舊有百餘小國相接 至魏時有三十國通好 戶有七萬 男子無大小 悉黥面文身 自謂太伯之後 又言上古使詣中國 皆自稱大夫 昔夏少康之子封於會稽 繼發文身以避蛟龍之害 今倭人好沈沒取魚 亦文身以厭水禽 計其道里 當會稽東冶之東 其男子衣以橫幅 但結束相連 略無縫綴 婦人衣如單被 穿其中央以貫頭 而皆被發徒跣 其地溫暖 俗種禾稻系甯麻而蠶桑織績 土無牛馬 有刀楯弓箭 以鐵爲鏃 有屋宇 父母兄弟臥息異處 食飲用俎豆 嫁娶不持錢 帛 以衣迎之 死有棺無槨 封土爲塚 初喪 哭泣 不食肉 已葬 舉家入水澡浴自潔 以除不祥 其舉大事 輒灼骨以占吉凶 不知正歲四節 但計秋收之時以爲年紀 人多壽百年 或八九十 國多婦女 不淫不妒 無爭訟 犯輕罪者沒其妻孥 重者族滅其家 舊以男子爲主 漢末 倭人亂 攻伐不定 乃立女子爲王 名曰卑彌呼 宣帝之平公孫氏也 其女王遣使至帶方朝見 其後貢聘不絕 及文帝作相 又數至 泰始初 遣使重譯入貢